

出品作品リスト

出品No.	作品名	寸法(cm)	作品管理番号
1	刷毛地抱銀杏文輪花皿	高さ4.7 口径18.5 高台径9.6	353
2	打刷毛地帆舟文隅切四方皿	高さ3.6 口径15.3 高台径9.2	355
3	打刷毛地藤花文隅切四方皿	高さ4.8 口径18.5 高台径10.9	354
4	吹刷毛地雲龍文四方皿	高さ5.0 口径18.3 高台径8.6	352
5	打刷毛地白鷺文輪花皿 五枚	高さ3.5 口径13.5 高台径7.0	348
6	打刷毛地忘貝文舟形皿 五枚	高さ2.7 口径10.5 高台径4.5	349
7	打刷毛地薄文舟形皿 五枚	高さ2.7 口径10.5 高台径4.5	14-Ha-16
8	打刷毛地野菊文隅切四方皿 五枚	高さ4.8 口径18.5 高台径10.9	358
9	打刷毛地野菊文隅切四方皿 五枚	高さ3.9 口径15.5 高台径10.9	14-Ha-38
10	刷毛地瓜文皿 五枚	高さ3.3 口径14.5 高台径6.1	14-Ha-110
11	刷毛地枝垂桜文四方鉢 五口	高さ4.9 口径11.1 高台径6.9	14-Ha-40
12	打刷毛目角立鉢 五口	高さ5.0 口径12.7 高台径4.9	351
13	打刷毛目角立鉢 四口	高さ4.7 口径13.7 高台径4.9	359
14	刷毛地山躑躅に蝶文蓋付碗 五合	高さ6.0 口径11.2 高台径4.4	14-Ha-100
15	打刷毛目茶碗(螢手)	高さ6.0 口径11.2 高台径4.4	356
16	打刷毛目茶碗	高さ5.3 口径11.0 高台径4.0	357
17	人参文皿(白現川) 五枚	高さ3.2 口径13.0 高台径6.5	350
18	人参文皿(白現川)	高さ2.9 口径12.5 高台径6.5	14-Ha-91
19	薄文舟形皿(白現川) 五枚	高さ4.1 口径15.5 高台径6.1	14-Ha-132
20	葡萄文角立鉢(白現川) 五口	高さ6.3 口径13.2 高台径4.6	14-Ha-41
21	紫陽花文鉢(白現川) 五口	高さ4.5 口径14.4 高台径6.8	14-Ha-43
22	枝垂桜文舟形皿(白現川) 十枚	高さ2.5 口径10.3 高台径4.5	14-Ha-95

幻の古陶 うつつがわやき

現川焼 たなかまる

—田中丸コレクションを中心に—

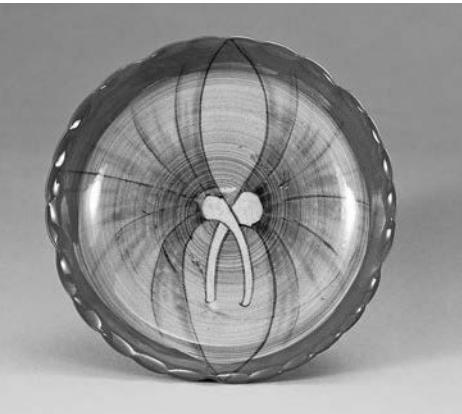
会期 2023年10月25日(水)～2023年12月17日(日)

会場 古美術企画展示室

共催 一般財団法人田中丸コレクション



出品No.5 打刷毛地白鷺文輪花皿 五枚



出品No.1 刷毛地抱銀杏文輪花皿



出品No.10 刷毛地瓜文皿(福岡市美術館蔵)



出品No.20 葡萄文角立鉢(白現川)(福岡市美術館蔵)

現在の長崎市現川町で17世紀末から18世紀前期にかけて焼かれた現川焼は、短い活動期間にあって華やかで個性的な意匠のやきものを創出しました。本展は、福岡市美術館に寄託されている田中丸コレクションを中心に、現川焼の名品を展覧します。

[田中丸コレクション] 百貨店・福岡玉屋の経営者であった田中丸善八氏(1894～1973)が長い年月をかけて蒐集した九州古陶磁コレクション。陶器を中心とする203件が福岡市美術館に、磁器を中心とする207件が九州国立博物館に寄託されています。

■現川焼が「幻の古陶、と呼ばれる理由

江戸時代中期の元禄4年（1691）、田中刑部左衛門なる人物が肥前国彼杵郡矢上村現川（現在の長崎県長崎市現川町）で陶器の生産を始めないと佐賀藩諫早家に願い出ます。

諫早家が佐賀藩の許可を取り付けると、田中刑部左衛門は次男の甚内、重富茂兵衛、中島弥次兵衛を伴って開窯します。

これが現川焼の始まりで、当時は村名にちなんで矢上焼とも呼ばれていました。

鉢や皿、碗など高級食器を主力製品にした現川窯は、諫早家や佐賀藩から御用品の注文を受けたり、領内や近隣周辺に流通していきます。開窯から6年後には上方（京や大坂周辺）へも販路を広げていくなど、窯の経営も順調だったようです。

しかし、宝永年間（1704-11）になると次第に暗雲が立ち込め始めます。

宝永2年（1705）には田中刑部左衛門と共に現川焼の開窯にかかわった中島弥次兵衛が隠居。宝永6年（1709）には窯から出火し、次男の甚内が60日間の謹慎を命じられます。さらに、宝永8年（1711）には現川焼の創始者・田中刑部左衛門が死去します。

この頃から御用品の注文が途絶え始め、元文3年（1738）に次男の甚内も死去してしまいます。諫早家の記録『日新記（諫早日記）』によると、延享（1744-48）の頃から経営不振に陥り、寛延2年（1749）にはすでに廃窯していると記されていますので、現川焼は開窯から60年も経たないうちに終焉を迎えたことになります。

このように忽然と現れて人知れず消えていくことから、現川焼はいつしか「幻の古陶、と呼ばれるようになります。

■現川焼の創意工夫

現川焼には陶土が暗褐色で刷毛目文様があるもの（出品No.1～16）と、伝世品は少ないですが陶土が白色で刷毛目文様のない「白現川」（出品No.17～22）の二種類があります。

もともとこの「刷毛目」というのは、化粧土を筆で塗ることで褐色の素地を白くするための技法ですが、現川焼の場合、その塗り方にさまざまな工夫を凝らしています。

例えば「打刷毛地忘貝文舟形皿（出品No.6）」は、化粧土を筆でリズミカルに打ち付ける「打刷毛目」という技法で、砂浜に打ち寄せる波を表現しています。

「吹刷毛地雲龍文四方皿（出品No.4）」は、竹筒から



出品No.6 打刷毛地忘貝文舟形皿 五枚



出品No.4 吹刷毛地雲龍文四方皿

息を吹きかけて化粧土を広げていく「吹刷毛目」という技法で、むらむらと湧きあがる雨雲を表現しています。

この他にも打刷毛目には蓮華刷毛目、牡丹刷毛目、ちりめん刷毛目、大波刷毛目、小波刷毛目。吹刷毛目には虫手など、現川焼の刷毛目文様にはさまざまなバリエーションがあります。

さらにその刷毛目文様の上から、秋草や瓜、藤、紫陽花、銀杏、水仙、葦に舟、野菊に蝶、薄など大和絵風な絵文様を釘彫りや鉄絵、銅緑釉、吳須で表します。

現川焼は薄くロクロ挽きした素地をシャープに変形させた器が多く、そこに刷毛目文様と絵文様を組み合わせる独特のデザインで、このような器は肥前陶器の中に見つけることが出来ません。

陶器生産とは無縁の土地に突然開窯しているため、肥前陶器の流れをくむものなのか、もしくは別の焼物から派生したもののかが不明です。

はたして、現川焼のルーツはどの焼物に見出すことができるのでしょうか。

その手がかりを探るには、田中刑部左衛門が現川焼

開窯以前にどこで何をしていたかを調べる必要があります。

■現川焼開窯以前の田中刑部左衛門

『日新記』によると、田中刑部左衛門は佐賀藩諫早家の被官（下級の家臣）として肥前国松浦郡有田（現在の佐賀県西松浦郡有田町）に在住し、延宝8年（1680）、天和3年（1682）、貞和4年（1687）に菓子鉢や香炉を諫早家に献上したと記されていますので、現川焼開窯以前は有田で磁器の製陶に従事する陶工だったという事がこの記録から読み取れます。

そして、長男の新三郎も有田在住で貞和4年（1687）に香炉を諫早家に献上していますので、父と同じ磁器の陶工とみて間違いないでしょう。

現川焼の根本史料である『日新記』では、ここまでのことしか判らなかったのですが、意外なところから田中刑部左衛門親子の事が判明したのです。

まず、昭和54年（1979）、有田町教育委員会によって佐賀県西松浦郡有田町の酒井田柿右衛門家が所蔵する約800点の土型（変形の皿・鉢・向付などを量産するための型）が調査され、それらの中に「貞享辰田中新三郎」「元禄式 田中新三郎」銘の土型が発見されました。

この銘は貞享5年（1688）、元禄2年（1689）に田中新三郎がこの柿右衛門窯の土型を製作したという意味ですから、長男の新三郎は柿右衛門窯の陶工だった事がこれで証明されたのです。

さらに、平成5年（1993）、福岡市美術館によって柿右衛門家の土型を再調査した際、「南川原山 田中刑部左衛門」銘の土型も発見されました。

これをそのまま額面通りに受け取ると、田中刑部左衛門が現川焼を始める前に有田で磁器の製陶に従事していた窯は、長男新三郎と同じ柿右衛門窯だったということになります。

はたして、この土型に刻まれた名前は、現川焼創始者の田中刑部左衛門と同一人物なのでしょうか。

というのも、田中刑部左衛門が現川焼を始める際、長男新三郎に家督を譲り、田中刑部左衛門は五兵衛に改名し、新三郎は刑部左衛門を襲名しています。

そして、刑部左衛門を襲名した新三郎は、家職（家によって世襲された職務、職能、官職のこと）を継いで有田で磁器の製陶を続けているのです。

ということは「南川原山 田中刑部左衛門」銘の土型は、新三郎が刑部左衛門を襲名した後の土型とも考えられます。

この土型には年号が刻まれていないため、現川焼創

始者の田中刑部左衛門が柿右衛門窯の陶工だったことを裏付ける証拠にはなりませんが、長男の新三郎が柿右衛門窯の陶工だったという事実と家職を継いでいる事、磁器のように薄くロクロ挽きしている事、シャープな変形の器を主体にしている事、土型を使用した型打成形（素地を土型に被せて、型の形や型に彫られた文様を写し取る方法）の器が存在する事、染付や色絵のように輪郭線を描いた後に輪郭内を塗っている事、余白を活かした構図にしている事など柿右衛門様式と共通する部分もあり、それらを考え合わせると田中刑部左衛門が柿右衛門窯の陶工だった可能性は十分にあり得るのではないかでしょうか。

■柿右衛門様式×矢上村の陶土+刷毛目文様 +大和絵風の絵文様=現川焼

以上の事から推測すると、現川焼はどうも柿右衛門窯にそのルーツがありそうです。

さて、ここからは私の想像ですが、おそらく田中刑部左衛門は現川焼を始めるにあたって次のように考えたのではないかでしょうか。

「柿右衛門窯で習得した技術をそのまま真似るのは仁義に反するし、藩の許しも得られないだろう。

新三郎の事もあるので、柿右衛門窯からは器形と描線、そして構図を参考にさせてもらおう。

矢上村で採れる陶土は鉄分が多く焼成すると暗褐色になるが、刷毛目文様を下地にし、その上に絵付けをすれば絵文様が映えるに違いない。

刷毛の塗り方もいろいろと工夫し、絵具も落ち着いた色合いにすれば、今までにない上品で和様（日本風）の食器が出来そうだ。

近頃、京都では京焼という色絵や錆絵染付の陶器が流行しているようだから、きっと上手くいくに違いない」と一。

[(一財)田中丸コレクション 学芸員 久保山炎]

参考文献

- 正林陶城著『現川焼の研究』学芸書院（1940）
- 有田町教育委員会『柿右衛門窯跡第三次発掘調査概報』（1979）
- 福岡市美術館『現川・長与・龜山展 つかさコレクションによる長崎の陶磁』（1993）